

## 夏にかかりやすい病気

今回は夏にかかりやすい病気を取上げてみます。夏カゼというと夏にひくカゼを連想しますが、実際には夏に流行しやすいウイルスによつてかかる病気のことを指します。

夏カゼはエンテロウイルスによるものが多く、その代表に「ヘルパンギーナ」があります。年齢は4歳以下がほとんどで、1歳台に多くみられます。症状は高熱が持続し、口の中に粘膜疹（水疱、潰瘍）ができ、口の中の痛みが強いのが特徴です。また、「手足口病」も同じ種類のウイルスによつておこり、4歳以下に多く2歳以下で約半数を占めますが、時に学童期に流行することもあります。口の中の水疱と手のひら足の裏を中心とした発疹（水疱）が特徴です。発熱の頻度は多くありませんが、やはり口の中が痛くなることもあります。夏カゼと呼ばれているにもかかわらず、両方とも咳や鼻水などの症状はほとんどみられません。口の中の痛みがひどくな

ると水分もとれなくなり、脱水症になることもあります。無理に食べさせずに、食べ物の味付けを考え、のみやすい水分を中心に与えましょう。

「咽頭結膜熱」も夏に多くみられ、アデノウイルスによつておこる病気の一つです。アデノウイルスは様々な症状を引き起こしますが、発熱・咽頭痛・結膜炎を伴うものが咽頭結膜熱で、プールを介して集団発生することからプール熱ともよばれます。典型的な症状以外に、下痢や嘔吐を伴ったり、頸部のリンパ節が腫れたりすることもあります。プール後にはしっかりとシャワーを浴び、目を洗い、タオルの共有はやめましょう。

「あせも」(汗疹)は、汗をかき過ぎることで皮膚の中に汗が溜まるために起こる病気です。子どもは大人と比べ汗をかきやすいこと、汗を出す能力が不十分なことが原因となります。最初は皮膚と同じ色の

盛り上がりで痒みはありませんが、炎症を起こし赤くなったものは痒みが出てきます。汗をかきやすい首の回り、胸や背中などに見られます。大事なのは予防とケアです。暑さを避けることはもちろんですが、皮膚を清潔にして汗をこまめにふき取る、洗い流すなどが必要ですが、軽いものはケアで治ってしまいますが、痒みや赤みが強いような場合には治療が必要となります。

「とびひ」(伝染性膿痂疹)も夏に多く見られるものです。虫刺され、湿疹、あせもなどを掻きくずし、黄色ブドウ球菌あるいは連鎖球菌が感染しておこる病気です。黄色ブドウ球菌によるものは、水疱ができるので水疱性膿痂疹とよばれ、乳幼児に多く夏にみられるのが特徴です。掻くことによつて、あちこちに飛び火のように広がるため名前が付く、手が届くところに広がるのが一つの特徴です。軽いうちには軟膏で治ることもありますが、多くは抗生物質の内服が必要となります。広がり始めたなら、早めの治療を心掛けてください。うつる可能性があるのも、患部をガーゼなどで覆うこと、裸土で遊ばせないなどの注意も必要です。

夏は汗をかいたり汚れがつきやすい季節です。汚れは石鹸などでしっかりと落とし、汗をこまめにふき取ったり、行水などをして清潔を心掛け、心配な場合は早めに診断を受けるようにしましょう。口の痛みが強くなると水分が取れなくなり脱水症の危険があるので、水分摂取量に注意して早めの受診を心がけましょう。今回の話題とは異なりますが、やはり夏に多い食物中毒に対する注意が必要なのは言うまでもありません。

ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック医院長。日本の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。『お母さん達の心配・不安の解消』を理念に、日々の診療にあたっている。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名誉のある日本小児科学会パネリストとして選ばれる。  
AERA(アエラ)臨時増刊号「日本初!かかりつけ医を探すガイド」日本の家庭医 08」(7月5日号)の町のお医者さん1435人の中で紹介される。  
<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>

★「耳!(寝るときにいつも私の耳を触ってます)」 こうせいくん(5歳)